

災害からの文化遺産の保護がそのコミュニティに与える resilience についての国際比較研究(2)

Effects of Protection of Cultural Heritages on Resilience of Communities Safety Nets in Islamic Cities

東原 紘道*・角本 繁*

Hiromichi HIGASHIHARA, Shigeru KAKUMOTO

1. はじめに

本研究は、災害からの文化遺産保護のあるべき姿を探るために、文化遺産がその地域のコミュニティに与える resilience を問うものである。言い換えると、文化遺産を保護の客体であるのみ見るのではなく、むしろそれを取り巻くコミュニティを支え保護する主体であると見、人間社会は文化遺産と共生して始めて成立しているのだと認識することから出発する。

文化財としては西アジアのイスラーム社会における歴史的建造物とする。この設定に至るまでには多くの契機の絡まりがあるが、西アジアが我が国の文化財＝伝統的文化財の一つの重要なルーツであることだけでも比較論の意義は明らかであろう。またイスラーム社会は矚目すべき草の根民主主義を内在的に備えており、文化の継承においても災害対抗力においても、ともすれば“お上頼み”に傾斜する我が国社会に対して、明確な代替案を示している。

さらにそれだけではなく、イスラーム自体あるいはその具象化であるイスラーム共同体は、現代西欧の公共哲学の陰の部分、およびそれに影響を受けた我が国の社会観念すなわち世俗化という名の公共観念放擲傾向に対して、重要な参照を提供することが予想される。言うまでもなく公共観念は文化遺産の拠り所である。たとえ工学アプローチであると断り書きしたとしても、もし我々の文化財保護活動が、その内面的裏付けをもたないものであるなら、非常に寂しいものになる。

この研究は、地理的な隔たり、言語の問題、宗教およびそれに起因する文化・風習等の問題があるため、事実上、地元の研究者と組む国際共同研究の方法によらないとほぼ不可能である。幸い、独立行政法人防災科学技術研究所・地震防災フロンティア研究センターは、平成 18 年度～平成 20 年度にわたって、科学技術振興調整費(アジア科学技術協力の戦略的推進・地域共通課題解決型国際共同研究のうち課題分類「自然災害への対応に資する防災科学技術分野の研究開発」)に採択された「アジア防災科学技術情報基盤の形成」の研究を進めている¹⁾。

この研究課題は、アジアでの防災に向けて我が国がリーダーシップをとり、アジアの国々ならびに国際機関と協力して、優れた「現場への適用戦略」を持つ防災科学技術を抽出・体系化して、アジア地域における情報基盤(Disaster Reduction Hyperbase - Asian Application=DRH Asia)をウェブ上に構築し普及を図るものである。これは国連防災世界会議(2005 年 1 月神戸)に基づく兵庫行動計画、および同会議に対して日本政府が提唱した「国際防災科学技術リスト」を実現する試みである。そこで我々はこれを傘にして研究を進めることとした。そこで 2006 年度に、災害研究

* 独立行政法人防災科学技術研究所・地震防災フロンティア研究センター
higashi@eri.u-tokyo.ac.jp, kaku@edm.bosai.go.jp

における宗教的要素の位置づけについて基礎的検討を行ったうえで、2007 年度は国際共同研究の連携態勢を構築したのでこれについて報告する。

2. 共同研究態勢の構築

イスラーム信徒の生活圏はほぼ全世界に広がっている。我々はアジアの枠組みで考えているが、その中でも最大のムスリム国家であるインドネシア多島海およびマレー半島などのいわゆる Coastal Muslim と、Desert Muslim すなわちアジア大陸に含まれる西アジア、中央アジアのいわゆるスターン諸国、さらにインドと中国にも信徒が生活している。しかも本来的に汎世界指向的で信徒間の格差を認めない傾向を内包するその教義が、それぞれの土地での社会と擦り合わせがなされる結果として実現されるイスラーム社会は多様である。例えばインドネシアとイランのイスラームには多様な違いが見られる。

我々は、まずこれまでの地震防災フロンティア研究センターの 10 年近い科学技術振興調整費による国際共同研究で実績のあるインドネシアに注目していた。特にムスリムの女子教育の水準の高さを手がかりに考えていた。後述の Orientalist 達は逆を言うことが多い²⁾が、ムスリムは草の根型の民生活動に熱心であり、しかも宗教施設が医療・教育など民生活動の拠点となっている。特に Coastal Muslim は子女の教育に熱心であることは顕著である。しかしインドネシアは、中国文化、ヒンドゥー文化とイスラームが層序を形成してジャワ島等の生え抜き要素と複雑に絡み合っている^{3),4)}。扱いが極めて困難であることから、我々の目標から外した(当然 DRH では重要なメンバーであり続けている)。

図 1 の楕円は、前述した DRH Asia の参加研究者の地理的範囲を示す。矢印は歴史上顕著な日本への文化伝来を示す。この地域は紀元 7 世紀前半に、瞠目すべき政治の地殻変動が続いた。すなわち、①618 唐建国、②622 ヒジュラ(イスラームの確立)、③628-642 唐僧玄奘のインド旅行、④636 アラブイスラーム軍の西アジア制圧、⑤646 大化の改新、④651 ササーン朝ペルシャ滅亡、⑥663 白村江と 676 所夫里州の戦い(日中の膨張が停止)。

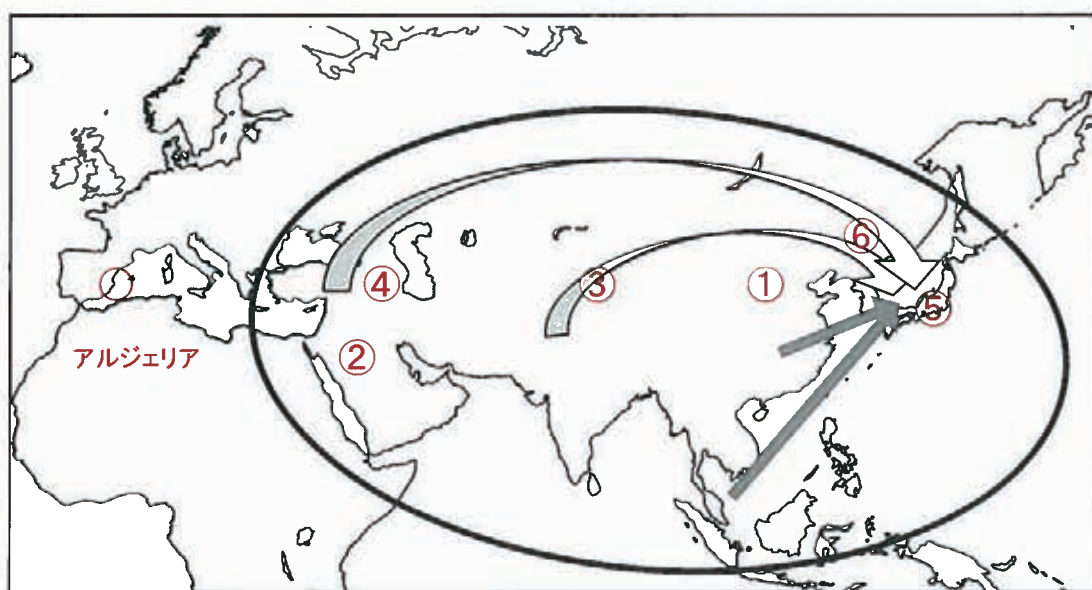


Fig.1 Geography of the DRH-Asia

ここにも見られるように一般に新たな統治機構を樹立した国は膨張傾向をもつ。アラブムスリムは海路の東漸を進め、この世紀既にインドに達している(東南アジア進出は14~15世紀を要し、スマトラ北西端のアチェ王国建設は16世紀初頭)。

以上のような文化の流れの場があるならば、終端に行くほど社会と文化の系譜が複雑になると考えられる。そこで終端に位置する我々は始端である西アジアと取り組むこととした。またイスラームは都市の宗教と呼ばれ、我々の研究意図との関係もあって、イスラーム都市の歴史的建造物と、その都市社会の災害に対するresilienceの関係に注目することとした。

既に平成18年度の報告書で述べたとおり、DRHプロジェクトの準備的性格をもつ別の科学技術振興調整費研究(平成17年度)の会合で、イスラーム圏の一つである北アフリカ・マグレブ地方のアルジェリアの研究者から、DRHにふさわしい事例としてアルジェ市のカスバの地震対策が報告された。1992年にユネスコの文化遺産に登録されたアルジェのカスバは、歴史のテストで実証された地震抵抗性があるとの主張である⁵⁾。

確かにアルジェは地震活動度が比較的高く、例えば1716年のアルジェ地震では大きな被害を蒙っている。アルジェは錯綜した細街路の入り組んだ街でいて、街区の形成経過、公共施設の展開、生活のスタイルは、西欧ないしは中国・日本とは全く異質である。その中に多くの伝統的施設や文物が存在する。また平成6年度報告で紹介した過剰都市論⁶⁾からすれば混乱の極みとしか見えないかもしれない喧騒の中に、多くの工夫や配慮が張り巡らされている。伝統ある文物の濃密なモザイク集合体としての都市全体を、尊重すべき文化財と見る視点は、全く異なる都市伝統をもつ我々には啓発的であった。具体的な議論はここでは省略するが、我々はいずれこのアプローチを京都に試してみる予定である。

しかしこのような都市構造は、それだけではアルジェのカスバに固有なものと言うことはできない。迷路風の街の膨らみは、有名なダマスカスなどイスラーム都市では一般的である。アルジェのカスバにはもちろんそれ固有の特徴があるに違いないが、それを認識するためにも、我々としては、まずより広くイスラーム都市として理解し、そのうえで個々の都市に立ち帰って行く必要がある。

3. 準備的研究

前章の検討に従い西アジアにパートナーを探すことにするが、研究者が親しくない社会に立ち入る場合には、まずその研究者の視座が反省されなければならない。もちろんその場合、研究者が取り囲まれている精神的世界を消去することはできないし必要でもない。むしろ全く異質に見えてでもしっかりした世界をもつ方が有利なことが多い。無色無宗教であれば異なる文化宗教に向かい合うことができるかという、事情は逆である。

西アジアイスラーム社会の場合、言語の障壁と宗教の障壁が存在する。異文化とは価値体系の異なる世界である。価値体系は、人間のこころの深層から湧き出す情念を駆動するコードであるから、価値の違いは、相手への強い差別意識、偏見につながる。文化の摺り合わせの過程はしばしば偏見と憎悪の過程であり、相異なる文化の出会いがしばしば衝突となり衝撃となる。

とりわけイスラームへのアプローチでは、不用意な言動が強い反発を惹き起こし、時にはペナル

ティを受けることがある。信者でない者の無邪気な言動が冒瀆的になることは稀でない。防災問題を全く技術的な事項に限定するという不毛なアプローチをとるのでない限り、イスラーム社会のパートナーを求めるためには多くの用意をしなければならないのである。そしてこの用意を、我々の内なる Western bias の点検から始めなければならないのである。それは、我々が手にしているイスラームに関わる知識は、殆ど西欧の研究者の成果に負っているからである。植民地支配の暗いガウンをまとっているとは言え、欧米はイスラーム社会に長い関与の歴史があり、知的蓄積は厚い。しかし我々日本人がもっている基礎知識は薄く、それも西欧経由のものである。このハンディキャップは非常に大きい。

西欧のイスラーム社会への関与の思想的基礎となる言説の否定的側面はオリエンタリズムの名で解き明かされてきている⁷⁾。もちろんおよそコミットメントには光と影があり、西欧のなした成果は大きいだが、ここでは議論されない。オリエンタリズムは、近世にグローバルなヘゲモニーを握った西欧が、非西欧全体をより劣った、西欧に支配されて当然なものとして看做すことであるが、著者が中東出身なこともあって、そこで描かれたオリエンタリズムの標的の中心はイスラーム社会であり、なかんずくトルコである。また、西アジア→中央アジア→中国・朝鮮→日本の流れを重視する我々の視点からすれば、ロシアによる抑圧的関与は大きな問題であるが、英仏と競合しつつ西、中央アジアを支配したロシアのオリエンタリズムには、市民社会の発展が遅れた影響で、剥き出しの暴力が表面化している⁸⁾。

イスラーム社会への直接のアクセスを必要とする我々にとってオリエンタリズムの問題が深刻なのは、学術的知見の多くを西欧に依存している我が国の研究者の間でも良心的と信頼されている西欧の研究者の偏見が鋭く指摘されていることである。例えば M. Weber については研究が多い。思想的問題点⁹⁾だけでなく、オットマントルコの法運用の恣意性を強調した Weber 説を実証的に否定した研究も多い¹⁰⁾。ロシアのオリエンタリズム論にあつては、ドストエフスキーやレーニンの偽善性が徹底的に暴露されている。

西アジア、中央アジアは人間の歴史の起源がきわめて古く、しかも“伝統”が現在の人々の生活を差配している。そしてこの伝統の通底にはトルコとイランが存在する。あたかもインドネシアにおける中国とインドのように。そこで我々は、“現代の”トルコとイランを起点にすることにした。どちらも親日国として定評がある。なお西アジアにはシリアという中原が存在する。文明の十字路として重要性は明らかであるが、現在の治安情勢では手の出しようがない。エジプトはスンニ主導の大国であるが、地理的な理由から除外した。逆に前述のアルジェリアは明らかにアジアの枠組みの外になるが、DRH の関係で重要な関連知見が得られることから、参照することにした。

トルコについては、著者の一人が既に、イスタンブール都市圏に、その防災情報システムを導入する試験を展開して実績を上げてきている。防災における文化・宗教は、彼の観察によれば現実の社会の在り様なのである。トルコは世俗主義を旗印に上からの西欧化を進めているが、イスラームが草の根的に伸長し、信頼性の高い社会のセーフティネットを開設・運用している。これがトルコの EU 加盟の阻害要因とされる一方、ムスリムが実現している社会福祉は、西欧の NGO の強い関心と支持を受けている。

イランについては、西側からはそのシーア派イスラームが警戒されることが多く、現在も核開発を巡って米国および西欧との政治闘争が続いている。西側からの経済制裁もあり、経済は長期間低迷しており、産業の不調も多く報道されている。一方我が国とは、石油を介した長い友好歴史があり、反米の国是もあって優秀な留学生を日本に送り込んできている。イランはアラブより長く豊かな文化的伝統をもち、イランのイスラームを理解するには、その文化的伝統を弁える必要がある¹¹⁾。他方で現代イラン社会を併せ考える必要があるが、その場合、文化財保護の具体例に即したアプローチと併行して、根基に存在する歴史的文化的背景を読みほぐす対話的な作業が必要である^{12),13)}。

参考文献

- 1) EDM (2007), <http://drh.edm.bosai.go.jp/>
- 2) バーナード・ルイス(2002), イスラーム世界はなぜ没落したか? : 西洋近代と中東, 今松泰, 福田義昭訳、日本評論社(2003)
- 3) クリフォード・ギアーツ(1968), 二つのイスラーム社会: モロッコとインドネシア、林武訳、岩波書店(1973)
- 4) Clifford Geertz (1973), *The Interpretation of Cultures*, Basic Books
- 5) Amina Abdessemed-Foufa (2006), *Contribution for a catalogue of earthquake-resistant traditional techniques in Northern Africa: The Case of the Casbah of Algiers*, Dissertation, University of Blida, Architecture Department, Blida, Algeria
- 6) Davis Kingsley and Hilda Golden (1955), *Urbanization and the Development of Pre-Industrial Areas*, in *Economic Development and Cultural Change*, Vol.13
- 7) Edward W. Said (1978), *Orientalism*, Random House
- 8) カルパナ・サーヘニー(1997), ロシアのオリエンタリズム, 柏書房(2000)
- 9) Bryan S. Turner (1974), *Weber and Islam : a critical study*, Routledge & Kegan Paul
- 10) ハイム・ガーバー(1994), イスラームの国家・社会・法: 法の歴史人類学, 黒田壽郎訳, 藤原書店(1996)
- 11) Martyr Ayatullah Murtada Mutahhari *Islam and Iran: A Historical Study of Mutual Services* <http://www.al-islam.org/al-tawhid/>
- 12) Mohshen Ghaffory-Ashtiany (2007), *The Islamic View of Earthquakes, Human Vitality and Disaster*, Proc. DRH Contents Meeting, 2007
- 13) Hiromichi Higashihara, *Preliminary Context Study for Application of the DRH to Islamic Societies*, Proc. DRH Contents Meeting, 2007